

日野市立日野第四中学校

令和6年度 授業改善推進プラン(英語科)

1. 生徒の現状

活用した資料等	各学年の分析結果
<1年生> (1) 日野市総合学力調査 (2) 学びに向かう力等に関する意識調査 <2年生> (1) 学期末アンケート (2) 学びに向かう力等に関する意識調査 <3年生> (1) 学びに向かう力等に関する意識調査	<1年生> (1) 日野市総合学力調査の教科に関する調査において、知識技能、思考判断表現のいずれの観点においても全国平均より3～4ポイント、日野市全体より1～2ポイント高い数値が出ている。ただ、数字を聞き取る問題については、A層とD層の正答率に大きな差が見られる。また、主体的に学習に取り組む態度に関する質問紙調査では、「日常的な話題についての自分の考えや気持ちを英語で伝える」という場面、また「相手の立場に立って質問や意見を言ったり、情報をまとめて伝える」という場面でA層とD層の意欲に大きな差が見られることがわかる。 (2) 学びに向かう力等に関する意識調査では、「英語の授業の内容はどれくらいわかるか」という問いに対して95%が肯定的な回答をしている一方、「英語の学習はどのくらい得意か」という問いへの肯定的な回答の割合は75%と差がある。学習の進め方に関する質問への肯定的な回答の割合は「確実にできるようになるまでくりかえしている」63%であった。意見をやりとりする場面に関する質問に対する肯定的な回答の割合は「他の人と意見が違うときに相手の意見をたしかめる」63%、「周りのひとや先生に自分の考えを伝えるようにしている」58%、「他の人の話を聞くときはメモをする」57%であった。 <2年生> (1) 1学期の学習についての学期末アンケートでは、①「チャイムが鳴る前に、授業に必要な教材や宿題などの忘れ物をせず、準備をした上で余裕をもって授業に臨むことができたか」や、②「教員からの質問に答えたり、ペア・グループ活動で協力したりと、授業に積極的に参加をすることができたか」などの質問に対して、3.8/5という結果であった。その一方で、③「小テストなどに向けて、事前に準備をしたうえで臨むことができたか」という質問に対しては3.7/5、④「日々の授業や宿題、テストなどで分からなかったものを分かるまで確認したり、自分に必要な勉強は何かを考えて改善に努めたりすることができたか」という質問に対しては3.3/5と①②の質問に比べると低い数値が出た。 2年生になってから授業の活動を頑張ろうという意識が出てきてはいるが、自分に必要な学習の自己調整まで出来ていないことが分かる。 (2) 学びに向かう力等に関する意識調査における①「英語の授業はどれくらい分かりますか」という質問に対して86%が肯定的な回答をしているが、「英語の授業はどれくらい得意か」という質問に対しては61%と大きく差が出た。「授業では、問題や活動に取り組んで「できた」「分かった」と感じる人が多いと思うか」という質問に対しては19%が否定的な回答をしていた。 <3年生> (1) 学びに向かう力等に関する意識調査では、「英語の授業の内容はどれくらいわかるか」という問いに対して69%が肯定的な回答をしている一方、「英語の学習はどのくらい得意か」という問いへの肯定的な回答の割合は53%と差がある。

2. 授業改善策

改善の観点	具体的な改善策
<1年生> (1) 家庭学習の内容の改善 (2) 自分の考えや気持ちを表現する機会を増やす <2年生>	<1年生> (1) 授業には積極的に参加し、内容を理解しているが、家庭学習でできないところをできるまで粘り強くくりかえす習慣がない生徒が多い。家庭学習のやり方を改めて紹介し、家庭学習のふりかえりを定期的に授業で行うようにする。 (2) Unit4の単元の目標を「身近な人などについて基本的な情報を紹介する」とし、Who is this?クイズをパフォーマンステストとして実施する。また、Unit6

(1) 指導と評価の一体化 (2) 「できた」「分かった」を実感できる授業づくり <3年生> (1) 自分の考えや気持ちを表現する機会を増やす	が終わったタイミングでは自分の好きな有名人やスポーツ選手、キャラクターを紹介するスピーチを行い、スピーチのあとに聞いていた生徒からスピーチの内容について質問をする時間を設ける。そのために、授業中に自分のことを表現する機会を教科書のパートごとに設定し、パフォーマンステストで使えるような表現や、言いたい表現を記録させる。 <2年生> (1) 生徒にどんな力を身に付けさせたいのかという目標を明らかにし、評価に向けて計画的に指導ができるようにしていく。また、生徒の活動を正確に評価し、次の目標に向けて必要な指導が何か常に見直していく。そのために、学期初めやテストの案内の際に、どのような内容を見取り、どう評価をしていくのかを事前に授業内で説明することを徹底し、何を・どのように・どれくらい学習すべきなのかを示し、生徒自身が自己調整できるように指導していく。また、担当の教員によって授業の内容に差異がでないように長期的な指導計画を常に確認し合える環境づくりをする。 (2) 生徒が「分かった」「できた」と実感し、意欲的に学習に取り組むことができるような授業づくりをしていく。そのために、新しい内容を学習する際には、習熟度が低い生徒でも理解・参加できるような活動から始めることや、既習の内容を様々な方向から複数回授業で取り扱うこと、習熟度の異なる生徒それぞれが新しい事を学ぶことのできる配慮などを徹底する。 <3年生> (1) 学びに向かう力等に関する意識調査において、学習の進め方の中で「自分が考えたことを、積極的に他の人や先生に伝えようとしている」という項目への肯定的な回答が50%で他の項目に比べて低かった。ESAT-Jスピーキングテストを控えていることも踏まえて、話す活動、書く活動において、ただの書き写しや暗唱に留めず、型のみ提示し、生徒自身の考えを伝える活動を増やす。
--	--